

第2回 「活性化」について

2006年 10月 2日

有限会社 マネジメント・ダイナミクス

小倉 仁志

jin-ogura@management-dynamics.co.jp

「つながり」が見えることが欠かせない

「活性化」イコール「やる気」ですが、これを妨げる一番の障害は、なんといっても「理解できない」という言葉に尽きます。

良くあるのは、「現場はこう思っているが、会社のトップからは別の課題が出されて困っている」という話を聞きます。

でも、その両方の中味を良く見ると、お互いの言っていることは同じで、言葉の使い方がちょっと違うために、意味が通じていない、理解できていない、うまく解釈できていない、というだけの話であるケースがほとんどです。

これは、中間管理職の方々が、双方の(現場とトップの)考えをうまくつなぎ合わせるできていないからなのです。

今一度、トップの言っていることと、現場でやらなければならないことを、付箋紙等を用いて、系統的につなげることを実施しましょう。(ルールは違いますが、やり方は、「なぜなぜ分析」と似ています)

もちろん、その中には、管理職としての想いを入れ込んで、つなげいくことが求められます。

出来上がった「つながり」は、現場の人たちから見ると、いわゆる年度の「筋書き」ということになります。

企業も、工場も、職場も、ひとつの舞台であると考えれば、一人ひとりがその「筋書き」の一片を担わなければなりません。

そのためには、「筋書き」(大きな筋書きから、小さな筋書きまであります)が分からなければ、どうやって動くべきか分かりません。

以上